



Title	ドイツ極右の着実な伸張
Author(s)	木戸, 衛一
Citation	阪大法学. 2007, 56(5), p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55229
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ドイツ極右の着実な伸張

木 戸 衛 一

—はじめに—「陽気な愛国主義」？

「世界よ、友だちのもとにようこと」をモットーに、二〇〇六年六月九日から一ヶ月間にわたりドイツで開催されたサッカー・ワールドカップでは、ホスト国の至る所で国旗が打ち振られ、「黒赤金」のグッズが氾濫するという予想外の事態が生じた。

このことに驚いたのは、ドイツ人自身である。アレンスバッハ世論研究所の調査によると、ドイツ人の五八%が「驚いた」と答え、「当たり前の現象だ」とする二八%を大きく引き離した。⁽¹⁾多少なりとも戦争の影を引きずる四五年以上の世代では、「驚いた」が六三%に達した。逆に、一六一九歳の若い世代では、「当たり前」が五一%を占めた。また、三〇歳未満の五八%は、自分自身も国旗などを身に纏つたという。

「黒赤金」は、もともと一八一八年頃ブルンシャフト運動において民主的自由・民族統一のシンボルとして登場し、一八四八年革命時フランクフルト国民議会によって「国旗」として定義され、ヒトラー政権下「ハーケン

クロイツ」に取って代わられた過去をもつてゐる。戦後西独では、一九四九年五月八日の議院評議会決定（反対は一票のみ）を受け、基本法第三条に「連邦国旗は黒赤金である」ことが記された。他方東独でも、一九五九年一月に中央に国章（環状の麦の穂に囲まれたハンマーとコンバス）が付け加えられるまでは、「黒赤金」が国旗であった。したがつて、一九九〇年の「統一」当時、国歌に比べ国旗をめぐる論議は非常に静かであった。

今回のワールドカップで、ボーランドやカーナ出身の選手も主力として活躍するドイツ代表を、地元のファンが定住外国人と一緒に応援する「黒赤金現象」は、「陽気な愛国主義」と形容された。⁽²⁾ 「黒赤金は、旗の前での直立不動ではなく、誰も恐れる必要のない社会とのリラックスした「一体化を意味する」というわけである。

先に紹介した世論調査でも、「このように観客がドイツ・チームと一体化したのはすばらしい」が七一%、「ドイツにも他国と同じように国民感情が存在することを示した」が六八%、「本物の連帯感が存在した」が五七%と、実に肯定的に受け止められている。「どちらかと言えば流行だ」という冷めた見方は一九%にとどまり、まして「ドイツ人がこのような国民感情を発展させたら、危険だ」とか「国旗は本当に不愉快だった」という否定的意見はそれぞれ三%にすぎなかつた。実際、ワールドカップでの国歌斉唱で「ナショナリズムとドイツ基本文化の雰囲気が運び込まれる」のを懸念し、「ドイツ国民への恐ろしい賛歌」を警告したウルリヒ・ティーネ教育科学労組委員長の発言は、「ビルト」紙を初め各方面からの反撃にあい、完全に封じ込められた。⁽³⁾

ワールドカップが終了した翌日の七月一〇日、国連のコフィー・アナン事務総長は、「世界はもはや、ドイツにおける過度の愛国主義に不安を抱いていない」と非常に好意的な感想を述べた。フランク・ヴァルター・シュタインマイアー外相は、「ドイツ人の『自己変化』」の素晴らしいしさを称え、ホルスト・ケーラー連邦大統領も、「新しいナショナリズムという大仰な政治行動をすることなく、自分たちの旗への賛同を表明する……よき愛国主義」と評価

した。普段はドイツ人の歴史意識に手厳しい、在独ユダヤ人中央評議会のシャルロッテ・クノープロッホ会長ですら、「自分の国に対する国民のこれほど自然な関係は、滅多に見たことがない。黒赤金を頬にペイントしたり、肩に背負つたりする自意識ある手軽さは、とにかくすばらしかった」という手放しの褒めようである。⁽⁴⁾

しかし、「愛国主義」は、ワールドカップで突然人口に膾炙したわけではない。一年前の二〇〇四年五月二三日、連邦大統領に選出されたケーラーは、「私は国を愛する」と公然と語った。社会民主党（SPD）から初めて大統領となつたゲスタフ・ハイネマン（任期一九六九～七四年）の「私は国家を愛さない。妻を愛する」という台詞と比べると、まさに隔世の感がある。

「愛国主義」の概念は、同年一二月六～七日、デュッセルドルフでのキリスト教民主同盟（CDU）第一八回党大会でかなり唐突に提起された。ラウレンツ・マイアーゲン幹事長が、赤緑連邦政府を「国民との感情的な関係がない」と非難したのに対し、フランツ・ミュンテンフェーリング党首は、「SPDは、誰からも愛国心の欠如を非難される必要がない」と反発、ゲアハルト・シュレーダー連邦首相も、「愛国主義とは、日々私が行っていることだ」と切り返した。

二〇〇五年九月一八日の連邦議会選挙を経て連邦議会議長となつたノーベルト・ラマート（CDU）は、一つの社会におけるすべての文化の悪平等を肯定するかのような「多文化性」の限界を指摘した。この発言に刺激されたCDUザクセン州支部では、「メディア・学問・学校における『六八年世代』の支配的解釈と、それと結びついた愛国主義的立場への不信を克服」するという「精神的転換」を求め、「国家と市民の一体化に資する」ために、国歌斎唱を小学校で義務づける提案すら行われた。⁽⁵⁾

ナチズムの過去を背負うドイツでは、「ナショナリズム」はどうしても否定的なニュアンスを帯び、これを主張

する政治勢力は極右の範疇に入れられる。他方「愛国主義」は、じく「普通」の概念として、容認あるいは称揚される。

しかし、「ナショナリズム」と「愛国主義」とは、それほど截然と区分できるものであろうか。たしかに、「陽気な愛国主義」自体は、排外主義と無縁の、むしろ極右を惑させる現象であった。⁽⁶⁾ そうだとしても、ナショナルな感情の表出という点で両者は繋がりをもつのであり、「ナショナリズム」は危険だが、「愛国主義」は人畜無害だとは言い切れないのではないだろうか。

二 ワールドカップ直前の不安

「極右」のマルクマールは、法学・政治学的アプローチでは、特定の政党・団体への所属・投票、社会心理学的アプローチでは、不平等のイデオロギー（外国人敵視・反セム主義・ナショナリズム・指導者原理）の信奉と暴力肯定の態度である⁽⁷⁾。大方の専門家は、ドイツにおける極右のポテンシャルを一三%程度と見てきた。

「統一」という名の、西独による東独の併合の後、極右暴力による死者は、合計一二〇人以上に達すると言われるが、⁽⁸⁾ ドイツ社会で極右問題が大きく取り上げられたのは、大別して三つの時期である。

- ① 一九九一年九月一七日ホイアースヴエルダ（ザクセン州）や、一九九一年八月二二日ロストック・リヒテンハーゲン（メクレンブルク・フォアポンメルン州）での難民収容所襲撃、一九九二年一月二三日メルン（シュレースヴィヒ・ホルシュタイン州）および一九九三年五月三〇日ゾーリンゲン（ノルトライン＝ヴェストファーレン州）での定住トルコ人住宅への放火殺人など、センセーショナルな事件が相次いだ。
- ② 一九九八年四月二六日、ザクセン＝アンハルト州議会選挙で、ミュンヒエンの新聞社主ゲアハルト・フライ

(Gerhard Frey) が率いるドイツ民族同盟 (DVU) が、突如一二・九%も得票し、第四の政党として一六六議席中一六議席を獲得した。

③ 二〇〇〇年には、四月二〇日（ヒトラーの誕生日）にエアフルト（テューリンゲン州）、「統一記念日」前夜にデュッセルドルフ（ノルトライン＝ヴェストファーレン州）でシナゴーグが放火され、六月一四日には、デッサウ（ザクセン＝アンハルト州）で、モサンビーケ出身のアルベルト・アドリアーノ氏（三九歳）が、三人のスキンヘッズに惨殺された。

二〇〇一年に入り、極右政党の中で最も戦闘的と目される国民民主党 (NPD) に対し、連邦政府・連邦議会・連邦参議院による違憲提訴が起こされた。ところが、NPDの幹部の中に、憲法擁護庁への情報提供者がいることが発覚し、翌々年三月一八日、連邦憲法裁判所は、審理取りやめを決定した。これ以降、極右絡みの報道は、かなり下火になつた。

しかし、言うまでもなく、極右をめぐる問題そのものがそれで解消したわけではない。とりわけ、ドイツ社会における暴力のボテンシャルの高まりは、学校を中心とした顕著である。二〇〇一年四月二六日には、エアフルトのグーテンベルク・ギムナジウムで、元生徒が教師・生徒計一六人を射殺するという米国並みの事件が起つた。二〇〇六年二月末には、生徒の八二%が外国人で、深刻な校内暴力に悩むベルリン＝ノイケルンのリュトリ基幹学校の教師たちが、救済を求める書簡を送っている。^⑨

このような状況を背景に、極右政党は、二〇〇四年九月二一日の州議会選挙で、ブランデンブルクのDVUが議席を維持、またザクセンのNPDも議席を獲得した。したがつて、ドイツがワールドカップのホスト国として極右暴力に不安を抱いていたのも、十分な理由があつた。

その不安は、大会直前の五月一六日、エチオピア出身でドイツ国籍を持つエルミアス・ムルゲタ氏（三七歳）が、ポツダム（ブランデンブルク州）の停戻場所で、暴漢一人に襲われ意識不明になつた事件で、一気に強まつた。彼は約二〇年同市に住み、ドイツ人の夫人との間に小さな子どもが一人いた。河川工事の技師として働いた経験のある彼は、事件当時博士論文を執筆中であつた。

翌日、第一次シュレーダー政権で連邦政府スポーツマンだったウーヴェ・カーステン・ハイエが、ドイツ・ラジオで「ブランデンブルク州の中小都市など、肌の色の異なる人が行つたら生きて帰れない場所がある」と発言した。SPD党紙『フォアヴェルツ』の編集長で、「世界に開かれたドイツ」行動協会の創立者でもある彼の憂慮は、それほど深かつたのである。

これに追い打ちをかけるように、一九日、クルド系のギヤセッティン・サヤン・ベルリン市議（左翼党、五十六歳）が、地元リヒテンベルクで二人の若者から罵られたうえ暴行され、頭部に重傷を負つた。彼も、ドイツ在住五年に及び、ベルリン自由大学で政治学を修め、左翼党議員団の移民政策スポーツマンであつた。

二二日には、ヴォルフガング・ショイブレ内相（CDU）が、二〇〇五年度版憲法擁護報告書を発表した。それによると、極右犯罪は前年より二七%増の一萬五三六一件、うち暴力行為は一三・五%の九五八件、暴力的極右の人数は四〇〇人増の一萬〇四〇〇人であることがわかつた。内相は、「外国人にとつて立入禁止地帯（No-Go-Areas）が存在してはならない」と述べる一方で、取り締まる警察の熱意が足らないという批判は「無根拠」と退けた。

ワールドカップが始まった六月七日、アフリカ評議会と国際人権連盟は、人種攻撃を防止する五カ国語のホームページを開設した。¹⁰さらに大会期間中の二四日、ザクセン＝アンハルト州の州都マグデブルク近郊にあるプレー

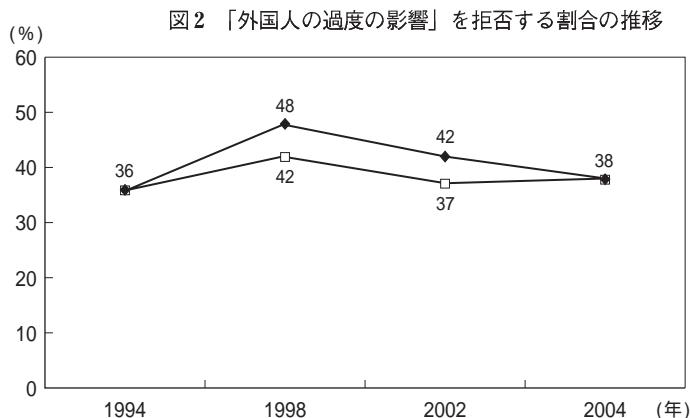
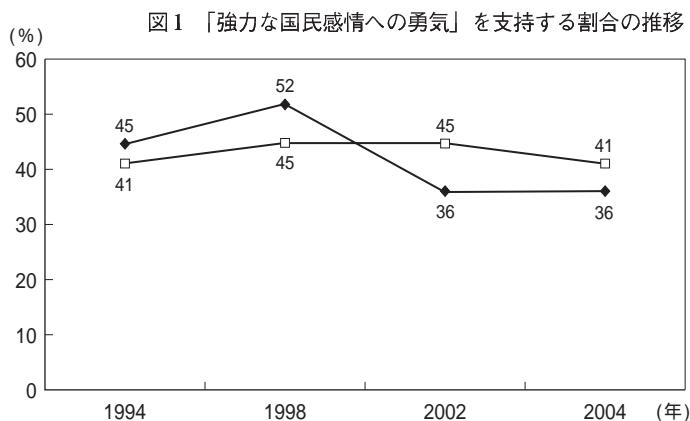
ツイエンでの夏至祭で、『アンネの日記』と星条旗が焼かれるという事件が起こった。夏至祭は、大きな火の回りで歌ったり踊ったりする古代ゲルマンの祭とされているが、ナチスにより、總統に忠誠を誓う儀式へと悪用された。『アンネの日記』の焚書は、ナチス犯罪の肯定を意味し、民衆扇動罪（刑法一二〇条）に該当する。ところが、駆けつけた警官は、『アンネの日記』がどういうものか知らなかつたため、単なる騒擾事件として処理されたところであつた。

このように、「陽気な愛国主義」が高揚している最中でも、極右は、その存在を誇示したのであり、散發的にせよ「過度の愛国主義」は表出していたのである。

三 極右現象の基層

極右は、国家・民族との一体化という「自然な」秩序を強調する民族共同体のイデオロギーを信奉する。そして、技術的というよりも文化的諸現象に敵対する反近代主義、自由主義・個人主義・國際主義・多文化主義などの排撃、人種主義・エリート主義的な色彩を帯びた社会ダーヴィニズム、常に暴力を秘めた行動主義・戦闘性・「英雄主義」といった価値を掲げる。⁽¹⁾

あたかも一握りの存在に映る極右の背後には、それを支える広範な住民層がいる。ライプツィヒ大学医学部のブレーラー教授らの調査によれば、①右翼権威主義独裁、②ショーヴィニズム、③外国人敵視、④反ユダヤ主義、⑤社会ダーヴィニズム、⑥ナチズムの無害化という極右的諸価値のうち、全般的に賛同する割合が高いのは、②と③である。二〇〇四年秋の時点で、「われわれはついに、強力な国民感情への勇気を再びもつべきである」というショーヴィニスティックな見解には三九・一%（東三五・五%、西四〇・八%）、「ドイツは、多数の外国人を通じて、

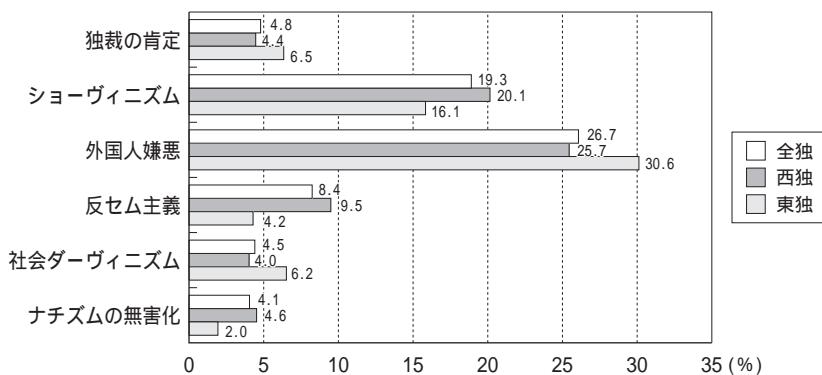


危険なまでに過度の影響を受けている」という外国人敵視の見解には三七・七%（東西同率）が支持を与えている（図1・図2参照¹²）。

この②・③のうち、内発性が強いのは、言うまでもなく前者である。そうした心性は、「統一」ドイツにおける「自意識」の増大、「ナショナル・アイデンティティ」の強調と密接に関係している。一九九〇年当時、「新しい愛国心」を四三%が不快に思い、これに好感を抱いたのは二三・一%にすぎなかつた¹³。また、一九九四年の時点で、「ドイツの歴史は、この国で国民感情やナショナル・シンボルを大

ドイツ極右の着実な伸張

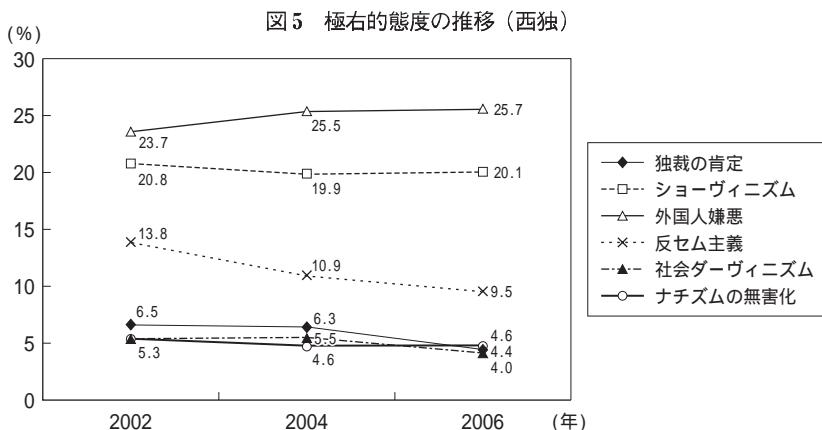
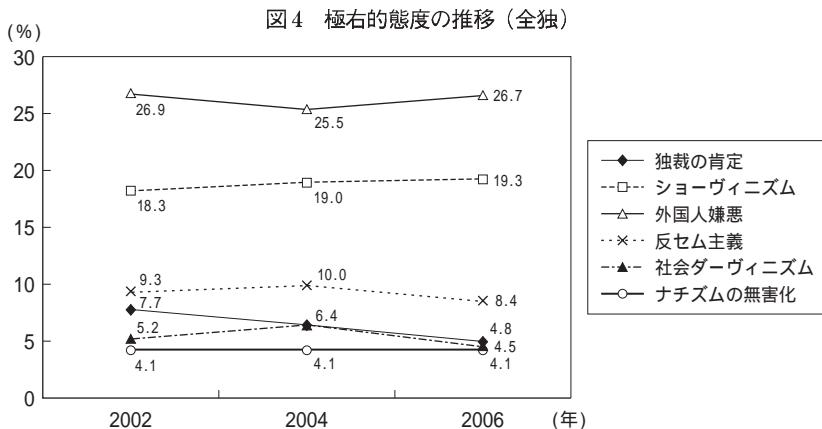
図3 ドイツにおける極右的態度



事にするのを禁じている」と考える割合は四四%であった。この数値は、今日では二二%に文字どおり半減している。そこには、歴史解釈における保守と極右のイデオロギー的親和性も確実に影響を及ぼしていると思われる。¹⁴

ブレーラー教授らの最新の調査結果は、一月八日、SPD系のフリー・ドリビ・エーベルト財団の委託による「周辺から真ん中へードイツにおける極右的態度とその影響要因」として公表された。¹⁵それによれば、一貫して極右的世界観の持ち主は、西（九・一%）が東（六・六%）を上回っている。つまり、極右が東独青少年に特有の現象とする見方は偏見にすぎないのである（図3～6参照）。

こうした極右的態度が特に強い州は、西ではバイエルン州、東ではメクレンブルク＝フォアポンメルン州とされる。個別的な設問に即して見てみると、「ナチズムにはよい面もあつた」には一一〇%（東八・七%、西一・六%）、「外国人がここに来るのは、われわれの社会国家を利用するためだけだ」には三七・〇%（東四三・八%、西三五・二%）、「価値のある命と、価値のない命とが存在する」には一〇・一%（東一一・四%、西九・八%）、「ドイツを強力に統治する指導者が必要だ」には一五・二%（東一・七・五%、西一四・六%）が賛同している。



従来の調査と比べると、外国人嫌悪は相変わらず高く、ナショナルなショーヴィニズムは東独で増大している。調査者は、あたかも社会の周辺的現象であるかのような印象を与える「極右」の概念を批判し、「社会の真ん中における政治問題」への注目を促している。

他方で注目すべきは、とりたてて思想性をもたない若者が、サブカルチャーを通じて、極右に引き寄せられつつある実態である。たとえば、ディスコ・パーティーやヘビメタ・パーティで、人種差別・暴力賛美の音楽が流れされ

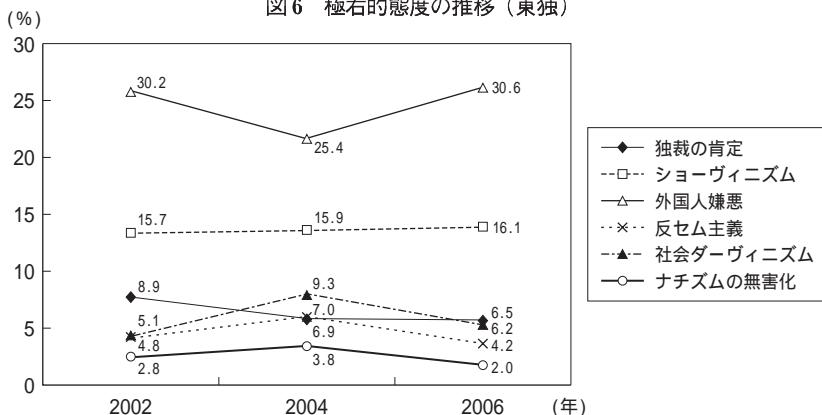
（阪大法学）56（5-10）1078 [2007.1]

國人嫌悪は相変わらず高く、ナショナルなショーヴィニズムは東独で増大している。調査者は、あたかも社会の周辺的現象であるかのような印象を与える「極右」の概念を批判し、「社会の真ん中における政治問題」への注目を促している。

他方で注目すべきは、とりたてて思想性をもたない若者が、サブカルチャーを通じて、極右に引き寄せられつつある実態である。たとえば、ディスコ・パーティーやヘビメタ・パーティで、人種差別・暴力賛美の音楽が流れされ

ドイツ極右の着実な伸張

図6 極右的態度の推移（東独）



る。代表的なのは、NPDが学校の前などで配っている「校庭CD」で、そこでは「新しい価値」(Neue Werte) というバンドが、「俺はお前の名前を知っている。俺はお前の顔を知っている。お前は、ひぶしで鼻をへし折られるのにふさわしくない」と、強者意識をくすぐっている。⁽¹⁶⁾

ほかにも、ファッショニの世界では、Constaple というブランドがあり、ジャケットを広げれば、ナチ党の略号NSDAPが目立つ仕掛けになつていて。また、一見何気ない数字の「18」が「アドルフ・ヒトラー」、「88」が「ハイル・ヒトラー」を示して、ナチス贊美に使われる。ほかにも、インターネットの世界や、反キリスト教・ゲルマン神話崇拜など、さまざまな場面で、極右は若者の間で文化的ヘゲモニーを握りつつある。」のようなことを背景に、ハーケンクロイツの落書きや煽動スローガン、ナチ・シンボルの表示が顯著に増加しているのである。

これまで極右的な態度は、女性より男性、高学歴より低学歴、有職者・主婦などよりは失業者に特徴的だとされてきた。しかし、長引く不況や社会福祉制度の解体により、それは、学歴の高い層などに広がりつつある。

ザクセン州憲法擁護庁によれば、同州における極右の数は、人口一人万人当たり七五人と、一六州中最悪であるという⁽¹⁷⁾。以下、ベルリン（七

一人)、メクレンブルク・フオアポンメルン(七〇人)、ザクセン・アンハルト(五九人)、ブランデンブルク(五四人)と、軒並み旧東独諸州が上位を占めている。全国平均は四七人、最も少ないのはノルトライン・ヴェストファーレンの二七人であるが、前述のフリードリヒ・エーベルト財団の調査報告が示唆するとおり、西独地域でいつまでも低水準にとどまっているという保証はない。

四 「右からの人民戦線」

ドイツの極右政党としては、NPD、DVU、共和党が代表格である。このうち、一九八三年一月に設立された共和党は、創立者フランツ・シェーンフーバー(Franz Schönhuber)の過激な言行で注目を集め、一九八九年一月二九日の西ベルリン市議会選挙で七・五%、同年六月一八日の欧州議会選挙で七・一%を獲得した。「統一」後も、一九九二年のバーデン・ヴュルテンベルクやベルリンなど、その勢いをしばらく保った。一九九四年党首の座となつたラルフ・シュリーラー(Ralf Schlierer)は、ある種洗練された政党を目指したため、却つてシェーンフーバー追放などの内紛を起こし続け、現在党勢は低迷している。

DVUは、一九七一年一月に誕生した。一九七五年、NPD副党首になり損ねた創設者フライは、一九八七年三月にDVUを政党化、NPDと連携し、九月のブレーメン市議会選挙で議席を獲得した。「統一」後は、一九九一年のブレーメン市議会選挙を皮切りに、散発的に議会進出を果たしている。ただし、DVUは、あくまでフライの個人政党であるため、議院活動では力量の乏しさを露呈している。

一九六四年一一月に結成されたNPDは、現存する極右政党の中で、最も古い歴史を持つ。不況の追い風を受け、一九六六一六年に七つの西独州議会で議席を獲得した⁽¹⁸⁾。その後長らく不振が続いていたが、「統一」後、禁止さ

表1 「統一」ドイツにおける極右政党の議会進出状況

NPD	DVU	共和党
	1991.9.29 ブレーメン市議会選挙 6.2%	1992.4.5 バーデン=ヴュルテンベルク州議会 10.9%
	1992.4.5 シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州議会選挙 6.3%	1992.5.22 ベルリン23区議会選挙 8.3%
	1998.4.26 ザクセン=アンハルト州議会 12.9%	1996.3.24 バーデン=ヴュルテンベルク州議会 9.1%
	1999.9.5 ブランデンブルク州議会 5.3%	
2004.9.21 ザクセン州議会 9.2%	2004.9.21 ブランデンブルク州議会 6.1%	
2006.9.17 メクレンブルク=フォアポンメルン州議会 7.3%		

れた不オナチ団体のメンバーなどを糾合して、急速に勢力を拡大した。¹⁹

NPDに合流した大物のネオナチに、マンフレート・レーダー (Manfred Roeder) がいる。彼は、ネオナチ・グループを率いて難民収容所を放火させ、またハンブルク社会研究所の展覧会「国防軍の犯罪」を妨害するなどの歴史がありながら、九〇年代半ば、連邦軍に招待され講演を行っていたスキンダルを暴露された人物である。

また、NPDの傘下に入っていた団体には、「スキンヘッズ・ザクセン・スイス」(SSS) がある。²⁰ 一九九七年のこの組織設立には、それ以前に禁止されたヴァイキング青年団やNPD役員が関与していた。外国人・麻薬患者・左翼を「浄化」する目的で、青少年クラブの襲撃、暴行・脅迫、さらに武器所有も働くSSSを、ザクセン州内務省は、二〇〇一年四月に禁止した。ところが、その後も活動は活発で、当局は摘発に乗り出さざるを得なかつた。その他にも、NPDは、共和党や、二〇〇一～〇四年にハンブルク市庁の一角を占めた法西国家的攻勢党 (PRO、

説
通称「シル党」の幹部を引き込んでいる。極めつけは、二〇〇五年九月の総選挙に際し、選挙運動期間中急逝した第一六〇選挙区（ザクセン州ドレスデンⅠ）の候補者に代えて、共和党創立者のシェーンフーバーを擁立したことである。

その前年、NPDは、九月のザクセン州議会選挙で一気に躍進、第三党のSPD（九・八%）に肉薄した。「ハルツIV」と呼ばれる労働市場改革、外国人労働者、EU拡大を攻撃する戦術が効を奏し、NPDは、女性（五・九%）よりも男性（二二・六%）、一八～二四歳の若年層（一六%）で高い支持を集め、実に一九六八年以来、州議会に議席を持つことになった。チエコに国境を接するラインハルツドルフ・シェーナでは、得票率は二三・一%に達した。ザクセン州NPD議員団の副議長となつたのは、SSSとの関係も取り沙汰されるウーヴェ・ライヒゼンリンク（Uwe Leichsenring）であった。二〇〇五年一月二二日、彼は、他のNPD議員とともに、州議会でのナチス犯罪犠牲者に対する黙祷を拒否、ドレスデン空襲五〇周年にかこつけて「爆弾ホロコースト」を非難した。翌年五月には、ナチ強制収容所に移送する「特別列車」が再びあってほしいと思つこともあると発言して、三日間の登院停止処分を受けた。このように目立つ存在だった彼が二〇〇六年八月末、トラックと正面衝突する事故により二九歳にして亡くなつたことは、NPDにとって少なからぬ打撃であつたろう。

もつとも、党勢拡大のための一連の動きは、党首ウド・フォイクト（Udo Voigt）に負うところが大きい。フォイクトは、一六歳でNPDに入党、一九八四年、連邦軍軍人としてのキャリアを捨てて党活動に専念した。一九九六年五月に党首に就任して以降、彼は党の規律化に努め、「頭脳をめぐる戦い」、「街頭をめぐる戦い」、「有権者をめぐる戦い」に加え、「組織化された意志をめぐる戦い」を展開し、「右の人民戦線」を構築しようとしている。その遠大な目標は、「BRDの清算」である。BRDとは、「ドイツ連邦共和国」ではなく「ドイツ占領共和国」の短

縮形である。

フォイクトは、政治面だけでなく文化面のヘゲモニー獲得を目指している。ベルリン＝ケーペニックの党本部の裏には、宿泊可能な研修センターが設けられ、「ドレスデン学派」形成を目指した人材育成が行われている。

二〇〇五年一月十五日、フォイクトとフライは、「ドイツ協定」を締結、二〇〇九年までの連邦議会選挙・欧州議会選挙・州議会選挙で、NPDとDVUのどちらが候補者を出すのか取り決めた。これに基づき、同年九月の連邦議会選挙にはNPDが参加、一・六%を得票した。これは、一九六九年九月総選挙（四・三%）以来の成績で、得票数は前回の二二万五〇〇〇から七四万四〇〇弱に大幅に伸びた。特に東独では得票率三・六%，ザクセン州では四・八%に達した。

五 連邦首相の地元での極右進出

二〇〇六年九月一七日に行われたベルリン市議会選挙とメクレンブルク＝フォアポンメルン州議会選挙は、改めて極右の着実な伸張を見せつけた⁽²¹⁾（表2）。

まず、アンゲラ・メルケル連邦首相（CDU）の地元メクレンブルク＝フォアポンメルン州では、NPDは六・五%増の七・三%を獲得、特に第三五選挙区（ユッカーランドウー）では一四・四%も得た。NPDの得票数は五万九六七四であるが、前回の選挙から、SPDから七〇〇〇票、CDUから一万二〇〇〇票、左翼党から四〇〇〇票、自由民主党（FDP）から一〇〇〇票、他党から六〇〇〇票、棄権層から一万一〇〇〇票程度を奪つたと推測されている。また、NPDに投票したのは、一八～一九歳の若年層の一七%、失業者の一八%、基幹学校卒の八%、実科学校卒の一%に達すると曰ざされている。⁽²²⁾

表2 2006年9月17日ベルリン市議会・メクレンブルク＝

フォアポンメルン州議会選挙結果

(単位: %)

	メクレンブルク＝ フォアポンメルン州	ベルリン市	東ベルリン	西ベルリン
投票率	59.2 (-11.4)	58.0 (-10.2)	53.8	61.1
SPD	30.2 (-10.4)	30.8 (+1.1)	29.8	31.4
CDU	28.8 (-2.6)	21.3 (-2.5)	11.4	27.7
左翼党	16.8 (+0.4)	13.4 (-9.2)	28.1	4.2
90年連合／緑の党	3.4 (+0.8)	13.1 (+4.0)	10.5	14.8
FDP	9.6 (+4.9)	7.6 (-2.3)	4.9	9.3
NPD	7.3 (+6.5)	2.6 (+1.7)	4.0	1.6

投票日のかなり以前から、NPDがメクレンブルク＝フォアポンメルン州議会で議席を取ることは予想されていた。九月八日に放送された第一テレビ（ARD）の州内世論調査によれば、NPDの支持率は7%であった²³。四%が同党に「確実に投票する」、五%が「ひょっとしたら投票する」と答えている。マンハイムの「選挙研究グループ」が九月四～七日に行つた調査でも、支持率はやはり7%であった²⁴。同党の州議会進出を「よくない」と考えているのは八〇%で、「どちらでもよい」は一〇%、「よい」は八%であった。

これら一連の数値は、NPDの選挙戦の「成功」を物語っている。NPDは、州内の至る地域で、特に初めて投票に行く若い有権者向けの運動を展開した。「校庭CD」の無料配布は、当然である。また、スキンヘッドに軍靴のようなブーツ、厚手のブルゾンというお決まりのネオナチ・スタイルではなく、まともな装いで子ども向け・家族向けのイベントも開催し、自分たちが「普通の政党」だとアピールもした。

筆頭候補者のウド・パステース（Udo Pastörs）は、一九五三年生まれ。ニーダーザクセン州からメクレンブルク＝フォアポンメルン州ほぼ西端のリュプテーンに移った金細工師である。市民的な外見と、「鋼鉄の刷毛でクズを一掃しよう」という攻撃的な言動が、一部選挙民から歓

迎されたわけである。

選挙戦中NPDは、ひたすら「羊の皮」をかぶっていたわけではなく、暴力的な「狼」の本質も見せつけた。他の選挙スタンンドを襲撃したり、極右に反対するデモ参加者の顔写真を撮ったりしたことは、十分な威圧効果を發揮した。「ナチスに一票もやるな!」という市民運動は、結局実を結ばなかつたのである。⁽²⁵⁾

他方、ベルリン市議会選挙では、NPDは、得票率二・六%（東四・〇%、西一・六%）で、議席獲得に失敗した。もつとも、得票数としては、前回（二〇〇一年一〇月二日）の一万五〇〇〇強から三万票以上上乗せしている。そして、NPDを含め、既成五党以外に、合計一二・七%（東一五・四%、西一二・六%）と、八・九%増の票が流れている事実は、きわめて重大と言わざるを得ない。

NPDは、同時に行われた一二の区議会選挙では、議席獲得の条件が得票率五%ではなく二%であることから、マルツアーン＝ヘラースドルフ（六・四%）、リヒテンベルク＝ホーエンシェーンハウゼン（六・〇%）、トレプトウ＝ケーペニック（五・三%）、ノイケルン（三・九%）の四区議会に、合計一人の区議會議員を送り込むことになった。なかでも、党本部のあるトレプトウ＝ケーペニック区議会には党首ウド・フォイクト、またリヒテンベルク＝ホーエンシェーンハウゼン区議会には歌手ヨエルク・ヘルネル（Jörg Hähnel）が議場に座ることになる。これらは、一九九九年一〇月一〇日の選挙で、共和党が二三区（行政改革以前）中六区議会に進出して以来の事態である。

そして、一一月一一一二日、NPDは、ついに「帝都」ベルリンのライニッケンドルフで党大会を開催するに至った。「民衆の真ん中から」というスローガンは、「周辺から真ん中へ」という先の調査結果を裏付けるかのようで、実に不気味である。当日、連邦議会に議席をもつ五党は共同の抗議集会を開いたが、党大会に反対して会場周

辺に集まつた市民の数は四〇〇人程度にとどまつた。

六 むすびにかえて

極右の台頭に対する既成政党の反応は、いかにも変わり映えがしない。彼らは一様に衝撃を受けた表情を見せ、再度の違憲提訴を主張する者もいる。あるいは、逆に過去の経験から、今回の議会進出も一過性の現象にすぎないと決め込む向きもある。

だが、以下の理由から、そうした樂觀論には根拠が乏しいと言わざるを得ない。第一に、メクレンブルク＝フオアポンメルンやベルリンに限らず、ドイツにおける政治不信・政党不信はますます深まっている。前出のライプツィヒ大学のブレーラー教授らが、「ドイツ統一」一周年直前に発表した「ドイツの状態」によると、憲法機関に対する評点（1「全く信用しない」から7「全幅の信頼を置く」まで）の比較で、政党は東で二・九一、西で二・二二と、連邦憲法裁判所（東四・三九、西四・九三）、警察（東四・四四、西四・九二）、連邦政府（東三・二五、西二・六三）よりも低く、最低である。⁽²⁶⁾ この議会に対する不信の根強さは、二〇〇一年一一月にアレンスバッハ世論研究所が行つた調査からも、既に明確に窺える。⁽²⁷⁾ それによれば、連邦議会に信頼を寄せて いる人は四一%で、東西別には東二・六%（一九九一年よりマイナス一六ポイント）、西四五%（同マイナス九ポイント）であった。

そして、この一月三日にARDで放送された世論調査では、ドイツにおける民主主義の機能に対して「やや不満」（三八%）ないし「非常に不満」（一三%）と答える人々の合計が、過半数に達した。四九%という「満足」派の割合は、この調査史上最低の数値であるという。

第一に、政治的な手詰まり状況を開けるために選択された大連合政権は、よほどの成果を挙げない限り、二大

表3 支持政党への落胆

	党に幻滅した	もう二度と投票しない
CDU/CSU 支持者	51%	22%
SPD 支持者	67%	33%

政党の野合と見なされやすい。六〇年代西独におけるNPDの台頭も、連邦レベルでの大連合政権が一つの要因になっている。

そもそも、二〇〇五年総選挙で、SPDとCDU/CSU（キリスト教社会同盟）は、合計得票率が七・六ポイント減の六九・五%と、凝聚力の低下を露呈していた。²⁹⁾しかも、この「敗者の大連合」の評判は、発足一年足らずで、著しく低下している。マンハイムの「選挙研究グループ」の調査によると、プラス五からマイナス五の範囲で、メルケル政権への評価は、成立直後の二〇〇五年一二月に〇・六だったのが、この七月にマイナス圈内に落ち込み、九月はマイナス〇・三であつた。特に深刻なのは、本来大連合政権を支持すべきCDU/CSU・SPD支持者が、いずれも大きな不満を抱いていることである。先に紹介した九月のARD世論調査では、特にSPD支持層に落胆の度が強いことがわかる（表3）。

第三に、ハルツIVに代表される各種の「改革」は、貧富の格差を拡大させ、広範な窮乏化現象を引き起こしている。それだけでなく、富裕層を優遇し、貧困層を国家財政立て直しの犠牲にする新自由主義の政策は、人々の疎外感・絶望感を募らせている。一一月のARD世論調査では、六六%の市民がドイツ社会を「不公正」と捉え、「公正」と答えた人は一七%にとどまっている。しかも、その差は七月（二〇ポイント）、九月（二七ポイント）と、拡大の一途をたどっているのである。

先鋭化する社会的不公正にもかかわらず（あるいはそれゆえに）、自由競争・自己責任の新自由主義を信奉する政治家が、「リスクの前にチャンスを見よう。連帯と公正のために自由の力を

説
呼び起りやう。やあやあなアイディアを実践に移そら」（「統一」一六周年記念式典でメルケル首相）と呼びかけても、人々の耳には空疎にしか響かないのは当然であらう。そして、冷戦終結後左翼の対抗言論が弱体化した状況で、新自由主義者たちによる国家の国民保護機能の削減を阻む政治勢力として人々が極右に期待を寄せやるゝやう、それなりに理解でおもへ。

第四に、少なべとむ「〇〇四年にNPDがザクセン州議会に議席を獲得して以降、「右からの人民戦線」戦術は、かなり有効に機能していく。今回のメクレンブルク＝フォアポンメルンでの選挙戦は、ザクセン州議会議員団長のホルガー・アプフェル（Holger Apfel）が指揮をとり、NPDをブルジョワ・オルターナティヴに見せる言説方法を持ち込んで成功した。やわらかく、若い層への文化的ヘゲモニーが定着しつつある」とも重大である。

今や旧東独五州のうち、三州で極右が議席をもつて至った。この傾向がさらに拡大し、西にも伝播しないと誰が断言でやれどもうか。「わたしが民主主義のうへにおこてナチズムが生き存えり」とを、民主主義に敵対するファシズム的諸傾向が生き存えりより脅威である、とみなすのです」（傍点原文）という哲学者アルベルトの警告が、半世紀近く時空を超えて鮮やかに甦る⁽³⁰⁾。

- (一) Renate Köcher, Ein neuer Patriotismus?, in: FAZ, 16. August 2006.
- (2) Stephan Hebel, Gute-Laune-Patriotismus, in: Frankfurter Rundschau, 23. Juni 2006.
- (3) Jürgen Elsässer, Der schwarze Kanal: Ein Sommermärchen, in: Junge Welt, 17. Juni 2006.
- (4) <http://www.faz.net/s/Rub47986C2FBFB461B8A2C1EC681AD639D/Doc~EC0360851A27F49F2B8E8DD08716511A8~ATpl~Ecommon~Scontent.html>
- (5) <http://www.netzeitung.de/deutschland/363969.html>
- (6) Patrioten verwirren Rechte, in: taz, 29. Juni 2006.

- (7) Klaus Wahl (Hrsg.), *Fremdenfeindlichkeit, Antisemitismus, Rechtsextremismus*, Berlin 2001, S. 189 f.
- (8) http://forum.extremismus.freenet.de/app/m/_t188278cp15c34142pf-1st0nachrichten_Rechtsextremismus_-unterschätzte_Gefahr_Extremismus_Nachrichten_Politik.html
- (9) めぐらん、学校現場で「暴力防止のプログラムに取り組んでいます。連邦政治教育センターの小冊子「暴力反対の手段」(Schrifte gegen Gewalt, Bonn 2000) や、トヨハゲン和平教育研究所編集のCD-ROM「暴力予防」との建設的紛争処理」(Konflikte XXL/Konflikte XXL-Global. Konstruktive Konfliktbearbeitung als Gewaltprävention, 2004) といった教材を発行しています。暴力が、外国人敵視・反ユダヤ主義・極右の親和性があれこれかどり暴力予防の教育が、市民的勇気を育成するものとして重視されています。
- (10) <http://www.prevent-racist-attack.org/>
- (11) Kurt Lenk, Rechtsextreme „Argumentationsmuster“, in: *Aus Politik und Zeitgeschichte (=APuZ)*, 42/2005, S. 21.
- (12) Oliver Decker/Elnar Brähler, Rechtsextreme Einstellungen in Deutschland, in: a. a. O., S. 12-17.
- (13) Köcher, Ein neuer Patriotismus ?, a. a. O.
- (14) 抽録「ニッペの『戦後六〇年』」『季刊戦争責任研究』第五〇号 (100周年冬), 115-116頁。
- (15) http://www.fes.de/rechtsextremismus/pdf/Vom_Rand_zur_Mitte.pdf
- (16) Annette Ramelsberger, Erkundungen in Ostdeutschland, in: *APuZ*, 42/2005, S. 8.
- (17) Sachsen ist Hochburg der Rechtsextremisten, in: *Berliner Zeitung*, 22. August 2006.
- (18) Eckhard Jesse, Das Auf und Ab der NPD, in: *APuZ*, 42/2005, S. 31-38.
- (19) 憲法擁護団体「たかだ」年末以来連邦・州議会議員選出候補団体が「100%対立現在」11月2日及23日。http://www.verfassungsschutz.de/de/arbeitsfelder/af_rechtsextremismus/
- (20) やの略称が、ナチス親衛隊 (SS) を想起させるものである。[北九州市議会議員選挙]「北九州市議会議員選挙」[北九州市議会議員選挙]「北九州市議会議員選挙」[北九州市議会議員選挙]
- (21) 両地方選挙にて2006年9月15日参院。<http://www.nikkamberita.com/read.cgi?id=200609251659041> (複数)
- (22) Forschungsgruppe Wahlen, Wahl zum Abgeordnetenhaus in Berlin und Landtagswahl in Mecklenburg-Vorpommern

